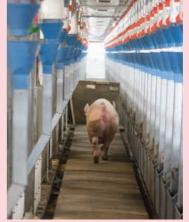




雌豚の背に乗った後、雄豚の細く長い陰茎が子宮に届くように スタッフが介助する。 スタッフが触れても、両方とも嫌がるそぶりはない。



本交を終え、自身のストールへと帰っていく雌豚。 どこか軽やかな足取り。



©(交尾)の様子。 ∪さはなく、つながったまま静かに時が過ぎていく。

## 発情を見極める

朝8時、豚舎の扉を開ける。スタッフを見つけた豚たちは、鳴き声のボリュームを一気に上げる。「豚たちは餌の時間をわかっていて、『早くちょうだい』と鳴いているんです」と、スタッフの一人、早坂歩さんが教えてくれた。

この日、豚舎を訪れたのは、豚の種付け、本交(交尾)を取材するためだ。種付けが始まるのは9時半過ぎから。それまでにスタッフたちは給餌と糞の掃除を済ませる。その間、豚舎を見学させてもらう。 分娩を終えた雌豚と赤ちゃん豚が暮らす部屋、乳離れした子豚が暮らす部屋、さらに出荷の日まで過ごす部屋など成長に合わせて部屋が用意されている。部屋を移動すると、鳴き声が高音から低音へと変わり、匂いも微妙に変わる。変わらないのは室温だ。快適な環境で過ごしてもらうため、ヒーターとファンを設置。

20℃以下にならないように設定されている。「始まりますよ!」。 種付けの部屋へと戻る。ここには、ランドレース種と大ヨークシャ 一種を掛け合わせた薄桃色の雌豚が380頭近く。 妊娠中安静に過ご してもらうため、ストールと呼ばれる個別の柵に入っている。

一方、雄豚は20頭前後。デュロック種は焦げ茶色でガッチリとしていて、イノシシを思わせる。3つの種を掛け合わせるため、佐助豚は「三元豚」と呼ばれる。

種付けは、発情している雌豚をみつけるところから始まる。 雄豚を電動のカートに乗せ、リモコンで操作。雌豚が並ぶストールの 前を通して反応を見る。

「発情していたら、垂れていた耳がピンと立ち、体がガチッと固まります」とスタッフの小向勉さんは言う。鉄柵越しに、顔を近づけて何かを確認し合う雄と雌。だが、なかなか反応は見られない。ストールの前を寂しげに通り過ぎる雄豚。と、そのときだった。ビクン!1頭の雌豚の耳が立った。一目惚れの瞬間を「電流が走った」と表現するが、まさしくそれだ。表情から読み取ることはできないが、体がその雄を求めたのだ。

この日、電流が走った雌豚は5頭。1頭ずつ順に、ストールの鍵を開けて雄豚の元へと向かわせる。雄豚の檻の傍にいた私は、雌豚の様子に衝撃を受けた。

スタッフに急かされたわけでもないのに、迷いなく一直線に自らの 意志で雄豚の檻へ向かってきたのだ。



陰部の膨れ具合や体が固まっているかを確認することで、 発情を判断する。



ストールの上には「種つけ記録」が掛けられている。 分娩予定日や種付け日がひと目でわかる。



雄豚の檻にお邪魔するところ。 顔と顔を近付け合い、まるで会話をしているかのよう。



晶約60cmのストール内で、雌豚たちは発情と妊娠を ごっと待つ。



雄豚をカートに乗せて、ストールの間を巡る。 発情を迎えていれば、通った瞬間に体が固まる。



AI (人工授精) の準備をしているところ。18℃で保管していた精子を、35℃まで温めて使用する。



保管用の精子。蒸留水と混ぜて、約100ccずつ分ける。



テーテルで、子宮へと精子を注入する。 業は5分程度で終わる。

## 時に静かに、時に激しく

距離を縮め、匂いをかぎあう2頭。見えない駆け引きが繰り広げられ、2分が経過したあたりだった。不意に雄豚が雌豚の背後に飛び乗る。ついに本交が始まった。そこに激しさはない。もぞもぞと位置を整えた後は、2頭ともジッとして、どこか遠くを見つめている。体だけではなく、心もひとつになった瞬間、のように、私には感じられた。数分後、雌豚が腰を振って嫌がり、雄豚が背中から降りた。雌豚は雄の檻に向かうときと同様に、スタッフに促されることなく一目散に自らのストールへと戻った。

今、紹介したのは、両想いだった場合の一連の流れだ。 人間も動物も、恋が必ずしも成就するとは限らない。発情したもの の大声で鳴いて足を止め、雄豚の檻に入るのを嫌がる雌豚。匂いを

かぎあうだけで、本交に及ばない雄と雌、etc.

うに介助する。

だが、本交をしなかった、と簡単に諦めるわけにはいかない。 久慈ファームでは毎週、約半年の生育期間を経た豚が約115~160頭 が出荷される。

種付けが成功して子豚が生まれなければ、そのサイクルが止まって しまうのだ。スタッフは、どうにか本交をさせようと促す。 雄豚が背中に乗った時には、陰茎をまさぐり、確実に子宮に届くよ

## 育まれる命

本交に臨む豚は200kg前後。巨体と巨体をコントロールしなければならないだけに、危険がともなう。女性スタッフでもできる安全な作業にするために、最近では AI(人工授精)へシフトが進んでいる。

精液と蒸留水を混ぜ合わせた液体約 100ccを 38℃に温め、40cm 以上あるカテーテルで子宮へと注入する。

雌豚をストールから移動させずに済み、安全に作業できる。

受胎確認するのは、本交から25日後。スタッフが雌豚のお腹にエコーを当てて確認する。着床していない場合は再び発情が始まる。 雌豚の1年の平均出産回数は、2.1~2.2回。個体差はあるが1母頭あたり約8回出産させ役目を終える。

改めて分娩室に行ってみた。赤ちゃん豚たちが母豚の乳を求めている。そこから少し離れたところに、息をせず横たわる姿があった。 雌豚が一度に出産するのは平均して12頭。そのうち約2頭は死産であったり、母豚に挟まれて圧死してしまうという。

母乳にありつけた赤ちゃん豚も安心はできない。母豚の顔に近い 乳房ほどよく母乳が出て、離れるにつれて量が減る。

競争に敗れた赤ちゃん豚は量の出ない乳房にしかありつけず、時間 が経つにつれて体型にあらわれる。

小さい豚は、離乳舎に移ってからも餌の争いに負けてしまい、淘汰 されていく。

命は儚く、だからこそ尊い。豚舎で育まれていく命に、感謝の念を。 私たちの食卓は、尊さの上に成り立っている。

